

清新中学校だより 清風

令和5年2月1日
第204号

本気になれば

校長 江戸谷 智章

ある報道番組を見ていたら、日本のフレンチの巨匠といわれている有名な料理人が、37年間続けてきたレストランを閉めるとのニュースが目にとまりました。正直、そのこと自体、それほど気に留めるものではなかったのですが、その料理人の生き様があまりに壮絶であったことを知り、皆さんと共有せずにはいられない気持ちになってしまいました。

その料理人の名前は、今年68歳になる三國清三（みくにきよみ）さんというフランス料理の第一任者です。本場のフランスからも日本の料理人として初のレジオン・ドヌール勲章を授与されるなど、数え切れないくらい受賞歴をお持ちの方で、まさに日本を代表するカリスマ・フレンチシェフとして、ご存知の方も多くおいでになるかも知れません。

7人兄弟の三男として生まれた三國さんですが、物心ついたときには極貧生活のまっただ中で、学校からも家の手伝いをしなくていいのかと追い返されたこともあったといいます。中学校卒業後、家計を助けようと住み込みで米屋で働いていた時に、初めて口にしまかたない食のハンバーグに感動し、将来、料理人になろうと決意するのです。その時、米屋の女性から「ハンバーグといったら札幌グランドホテルが一番おいしい」という話を聞き、三國少年は何のつてがあるわけでもないのに、そのホテルの料理長のところに直接出向き、「どんなことでもします！使ってください！」と懇願し続けるのです。料理長は、彼の熱意に動かされ、これまで中卒の従業員を雇うことなどなかったにもかかわらず、彼を皿洗いとして採用することを決めるのです。

採用当初、彼は従業員食堂の皿洗いをしていましたが、何としてでもホテルの調理場で仕事をしたいという一念で、ホテルの宴会場から出る皿や鍋もすべて洗わせてほしいと上司にお願いすると、これまでの丁寧な仕事ぶりが評価されて願いが叶い、そしてその半年後にはなんと正社員として雇われるまでになるのです。とは言え、皿や鍋洗いの仕事は変わりません。彼は来る日も来る日も全ての皿や鍋を完璧に磨き上げると、ただ一人、料理場に残り、明け方まで鍋の振り方や包丁の使い方などの練習をして、なんと入社3年目にはホテルのレストランで責任ある仕事を任せられるまでになるのです。

ところが若気の至りからか、三國さんはしだいに仲間を見下すようになり、周囲からもうとましがられてしまいます。ある時、先輩と口論になり、「帝国ホテルという日本一のレストランには『料理の神様』と言われる料理長がいて、その人が作る料理と比べたら、お前の料理なんて足下にも及ばない」と断罪され、料理の奥の深さと自分自身の視野の狭さに気づかされるのです。すると彼は、いても立ってもいられず、すぐさま上司に帝国ホテルへの推薦状をお願いすると、東京への上京を果たしてしまうのです。

しかし当時の日本はとても不景気で、推薦状があっても仕事につけるような時代ではなく、帝国ホテルからも採用はないと断られてしまいます。普通の人ならこの時点で万事休すなのでしょうが、三國さんは違いました。少しでも帝国ホテルに自分の痕跡を残したいと思い、「ホテルにある18のレストラン全ての洗い場で鍋洗いをやらせてほしい」と願い出るのでした。その熱意から、彼は皿洗いのパートとして雇われ、鍋洗いかたのかわら、皿に残ったソースを指ですくってはそれをなめ、一流の味を身につけていくのです。

こんな生活が2ヶ月ほど続いた頃、「料理の神様」と呼ばれていた料理長が三國さん呼び出し、「帝国ホテル650人の料理人の中で一番腕のいい料理人をスイスの大使館の料理長に派遣することとなった。君を推薦しておいたので準備しておきなさい」と信じられない話が告げられます。「料理の神様」はその理由を自らの著書の中で、「彼（三國さん）は、鍋洗い一つとっても要領とセンスが良かった。戦場のような厨房で次々に雑用をこなしながら、下ごしらえや盛りつけを手伝い、味を盗む。ちょっとした雑用でも、シェフの仕事の段取りを見極め、いいタイミングでサポートする。それと、私が認めたのは、塩のふり方だった。厨房では俗に「塩ふり3年」と言うが、彼は素材に合わせて、じつに巧みに塩をふっていた。実際に料理を作らせてみなくても、それで腕前のほどが分かるのだ」と回想しています。

三國さんの海外での活躍も筆舌にしがたいくらいの行動力で自らの道を究めていくのですが、紙面の都合でここまでとします。料理とは全く関係もなかった極貧の生活から、世界に名を残す一流のシェフにまで上りつめた彼の原動力はどこにあったのでしょうか。三國さんは著書の中で、幼い頃、父親と手こぎ舟で漁に出た時に、「波が来たら、まっすぐに突っ込め」と教えられ、「いまだにおっかないものほどまっすぐに突っ込んでいます」と答えています。未知のことは誰もが不安です。しかしそれを乗り越えていかない限り、夢を手にするにはできないかも知れません。三國さんの人生から、あらためて自分自身も「本気」について考えさせられた私です。

(注)『三流シェフ』三國清三著（幻冬舎）から一部抜粋



感謝の気持ちをもって

教務主任 葉袋 剛紹

2022年度もコロナは収束せず、どんな場面でも感染症対策をしながらの生活が続いた。コロナ禍だったが、昨年夏、家族で妻の実家へ帰省し、そのとき甲子園へ行って1日試合を観戦した。観戦したどの試合も生徒が最後まで諦めずに戦い、頑張る姿を見ることができた。観戦した中で国学院栃木と智弁和歌山高校の試合のプレー以外で感心したことが2つあった。

1つ目は甲子園常連校の智弁和歌山のスタンド。攻撃でチャンスになると「Jock Rock」という曲が演奏され、選手はその応援を力にして攻撃をする。つまり相手校はピンチである。当然流れを変えたいのでタイムを取ってマウンドに集まる。野球ではよくある風景が、球場にいたからこそ気になったことがあった。智弁和歌山の応援団員が指示を出した訳ではないが、吹奏楽部の演奏の音量が下がり、メガホンでの応援がストップした。吹奏楽部員の少しの気遣いがスタンドにいる人に伝わり、グラウンドにいる選手だけでなくスタンドも1つのチームになって試合に臨んでいて凄いなと感じた。



2つ目は試合終了後のちょっとした1コマ。メンバーに入れなかった3年生の細かい分析もあって勝利を掴んだのは国学院栃木。その試合終了後、両校の選手達はホームベースを挟んで左右に整列して挨拶をする。敗者はベンチ前で整列、勝者はホームベースの左右に並んで校歌を歌い、一礼してスタンドへ挨拶へ行く。こちらもよくある見慣れた風景である。ただ、国学院栃木のキャプテンとエースの2人だけだったが、敗者である智弁和歌山のベンチに一礼してスタンドに挨拶へ行く仲間を追いかけていた。他にも同じような学校があるのかなと思い、テレビ中継を見ていたら、ベスト4に進出した近江、ベスト8に進出した愛工大名電の2校（他にあったかもしれないけど）が全員でベンチ前に並んだ対戦校に一礼してからスタンドに挨拶に行く姿があった。



甲子園で試合をした選手は、保護者、学校関係者、大会関係者、球場スタッフなど数多くの人々に支えられて試合をしたが、相手がいたからこそ素晴らしい試合ができたと思う。相手に感謝の気持ちを持てるように「気配り・目配り・心配り」ができる大人になってほしいと思った。

清新中学校区では身につけたい3つの力として「深く考える力・思いや考えを行動にする力・自分に負けない力」を掲げている。この3つの力は、卒業後も必要だと思うので日頃より相手のことを考え、視野を広く持って活動に取り組んでほしいと思う。

2月の主な日程

※下記の日程につきましては、今後変更が予想されます。ご了承ください。

2月 ※月・木は原則諸活動なし

- 1日(水) 学習相談(1・2年)① 全校集会
- 3日(金) ときわぎ級おはなし会
- 6日(月) 国際級おはなし会
共通選抜志願変更～8日
- 7日(火) 学習相談(1・2年)②
- 8日(水) 学習相談(1・2年)③
- 9日(木) 生徒会委員会
- 10日(金) 3年給食最終日
- 11日(土) 諸活動なし～16日
- 14日(火) 1・2年定期試験～16日
共通選抜学力検査～16日
学期末三者面談(ときわぎ)～16日



- 22日(水) 共通選抜追検査
- 23日(木) 天皇誕生日
- 24日(金) 生徒会中央議会
- 28日(火) 共通選抜合格発表

3月

- 2日(木) 卒業式予行
定通分割・二次募集出願～3日
- 3日(金) ときわぎ級おはなし会
- 6日(月) 国際級おはなし会
定通分割・二次募集志願変更～7日
- 8日(水) 第50回卒業証書授与式

